新響

アマチュアオーケストラ
新交響楽団第118回演奏会

〔新響マーラーシリーズ第10回〕
マーラー 交響曲第4番

ムソルグスキー《禿山の一夜》
ラヴェル《スペイン狂詩曲》

●指揮 山田一雄
●ソプラノ 大沼美恵子



1988年1月17日(日)

新宿文化センター 2:00p.m.

アマチュアオーケストラ
新交響楽団第118回演奏会　―― 新響マーラーシリーズ第10回 ――

モデスト・ムソルグスキー/リムスキー＝コルサコフ：交響詩「禿山の一夜」

M. Moussorgsky/Rimsky-Korsakow：“Une Nuit sur le Mont chauve”

地獄にうめく亡霊たちのさわぎ――闇の精が現われ、つづいてサタンの登場――サタンへの頌栄と地獄のミサ――妖婆たちの饗宴――饗宴の最中、はるけき村の教会から鐘の音ひびき、闇の精たち消え去る――夜が明ける

モーリス・ラヴェル：スペイン狂詩曲

M. Ravel：“Rapsodie espagnole”

Ⅰ．夜への前奏曲 “Prélude à la Nuit”
Ⅱ．マラゲーニャ “Malagueña”
Ⅲ．ハバネラ “Habanera”
Ⅳ．祭り “Feria”

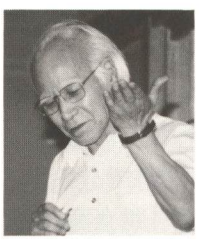
＊　＊　＊　休　憩　＊　＊　＊

グスタフ・マーラー：交響曲第４番　ト長調

G. Mahler：Symphonie Nr. 4 G dur

Ⅰ．Recht gemächlich
Ⅱ．In gemächlicher Bewegung. Ohne Hast
Ⅲ．Ruhevoll
Ⅳ．Sehr behaglich

1988年１月17日(日)午後２時
新宿文化センター
主催／新交響楽団　協賛／日本マーラー協会



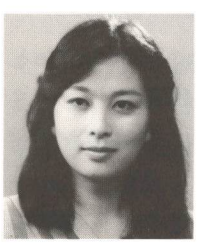
山田　一雄

1912年東京生まれ。

1935年、東京音楽学校ピアノ科卒業、37年専攻科修了。マーラーの弟子プリングスハイムに作曲を学び、日本放送協会懸賞１等、ワインガルトナー賞などを得て作曲家としての地位を築く一方、ローゼンシュトックに指揮法を学ぶ。1941年新交響楽団（現N響）補助指揮者、翌42年、日本交響楽団と改組の際、専任指揮者に就任。マーラーの交響曲第８番、ストラビンスキー「春の祭典」、ベートーヴェン「荘厳ミサ曲」等、多くの日本初演、邦人作品初演を手掛け、日本の音楽界の指導的役割を果たした。

現在、京都市交響楽団芸術顧問正指揮者、新星日響名誉指揮者、日本マーラー協会理事長等をつとめる他、東京芸大、武蔵野音大等で指導にあたっている。

76年紫綬褒章、78年芸術選奨文部大臣賞、84年勲四等旭日小綬章、86年芸術院賞を受けた。84年より当団名誉指揮者。



大沼　美恵子

東京芸術大学音楽学部及び同大学院修了。第29回全日本学生音楽コンクール東日本大会第１位。第53回日本音楽コンクール入選。NHK-FM 新人演奏会出演。第198回芸大定期演奏会のブラームス「ドイツレクイエム」、台東区主催ベートーヴェン「交響曲第９番」や、バッハのカンタータ、ヘンデル、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト等の宗教曲のソリストを務める。又、リート演奏会や、浜松交響楽団定期演奏会にて「オペラアリアの夕べ」を開催する。’87．５月には、札幌にて初のリサイタルを行ない、好評を博す。又、’87．10月、東京芸術大学創立百周年記念オペラ公演において、グルック作曲の「オルフェオとエウリディーチェ」（山田一雄氏指揮）のエウリディーチェ役を演じ、オペラデビューを果たす。三林　輝夫、中山　悌一、植木　桂の諸氏に師事。現在、二期会準会員、日本フーゴー・ヴォルフ協会同人会員。

山田／新響／マーラー

山田一雄／新交響楽団による「マーラー・シリーズ」もいよいよ大詰めを迎え、この「第４」がすむと残るは「第１」だけとなった。だが新響そのものは芥川氏の指揮ですでに「第１」を演奏しているので、今日の演奏で事実上マーラーの全交響曲演奏を達成することになる。アマチュア・オーケストラがここまで積極的に、かつ高度な演奏を展開しているということは、マーラー演奏史上記念すべき記録としてのみならず、オーケストラ活動の快挙のひとつとして心から祝福したいと思う。

この活動に触発されてか、近々マーラーの演奏を目的とした“東京・マーラー・ユーゲント・オーケストラ”がすでに結成され、来月その演奏（山田指揮：「第９」）が披露される。また二年前、ウィーンではクラウディオ・アバドによって“マーラー・ユーゲント・オーケストラ”が結成され、すでに活動が始まっている。マーラー音楽ファンはこれからも増々忙しくなりそうだ。

私はよく新交響楽団のメンバーから手紙をいただく。それによるとマーラーなどの難曲の場合、半年くらい前からその練習がはじまるようで「早くもマーラーとの格闘がはじまりました」などと書いてある。私は思わずニヤリとすると同時にそれがまたうらやましく感じる。プロのオーケストラの場合だと、練習についやす時間はどんなに長くても５日くらいであろう。私がこの演奏会で一番楽しみにしているのは、そんな新響のメンバーが何ヵ月も格闘した姿を想像しながら耳を傾けることにある。中には暗譜してしまう人もいると聞く。楽譜を見ないで指揮者の顔ばかり見ている人がいたらそれだ、などと楽しませてもらっている。

現在多くのプロのオーケストラが膨大な数の演奏会を、いわば消化的に仕事をしている中で、私にとっては新響の演奏会がなによりも楽しく、ある意味においてはオーケストラとして理想的なものに思えてくる理由はそこにある。メンバー全員がマーラーをラヴェルを本当に演奏したくて楽器を抱えているんだなと、心から感じられてくる。いかにしたら演奏会を妨害できるか、などと策略をめぐらした楽員の多くいたマーラーの生きていた当時を思えば、長期間楽譜を抱え積極的に演奏論をくりかえすこの新響の素晴しい姿をみて、マーラーもきっと救われる思いがするだろう。

マーラー演奏に限らず、山田一雄／新交響楽団が今後もより積極的に、一層の高みをもとめた演奏活動を続けることを期待したい。

●楽曲解説 —— マーラー 交響曲第４番 ト長調

冒頭のスズの音からフィナーレの茶目っ気と深い神秘性をもった歌曲にいたるまで、言いあらわしようのない魅力に富んだ作品である。しかもフィナーレの歌曲は、単独のピアノ伴奏付歌曲として８年前に完成されていたもので、この歌を永いあいだ温めていたマーラーのこの曲に対する執拗な愛着がうかがえる。それゆえ、四つの楽章で構成されたこの作品の第Ⅰ楽章から第Ⅲ楽章まではフィナーレをめざす前奏曲の性格をもっている。いわばフィナーレ歌曲のテーマがあらゆる姿をもって秘密裏に変奏されていく。

マーラー作品中、めずらしくピアノで弾いても表情が出せる曲で、マーラー自身、美貌の女性アルマに二度目のプロポーズをしたのも、二人でこの曲を連弾したあとであった。またマーラーは晩年に終楽章だけをロールパンチ式ピアノに録音している。終楽章の歌曲「天上の生活」をイメージしてか、

オーケストラも全体に高音域が強調され、めずらしく低音管楽器のトロンボーンやチューバが編成から除外されている。なお、この曲のいくつかのテーマは前作「第３」にも表れているし、第Ⅰ楽章のトランペットの進軍ラッパの音形はこのあとの作品「第５」の冒頭で再現されている。これらの作品と一緒に聴けばこの曲のユーモラスかつ特異で非現世的な性格が一層理解できるであろう。

◆第Ⅰ楽章　ゆったりと、急がずに

マーラーにはめずらしく古典的な書法を軸にした楽章で、ハイドンすら連想させる。しかしその実は非常に豊富な主題が巧妙な対位法処理で展開されている。「現代の作曲家の課題はバッハの対位法をハイドンとモーツァルトの旋律法と結合することだ」という彼の言葉が思いおこされる。また、展開部では鳩笛（オカリナ）を連想させるような４本のフルートのユニゾンも登場し、この曲の現世からの飛翔が印象的にあらわされる。

◆第Ⅱ楽章　気軽な動きで、急がずに

マーラーが当初≪死神は踊る≫という標題をつけたように、グロテスクな印象をもつスケルツォ。この楽章だけのために、一音高く調律されたフィーデル（“安ヴァイオリンのように”と記された）独奏ヴァイオリンが用意されたり、ハープの印象的なアクセントでガラスの一片がキラリと光るような繊細な楽器処理がほどこされている。マーラーにとっては終楽章の天上の生活に到達するまでの道案内がこの“死神”なのであろうか？

◆第Ⅲ楽章　平安に満ち、静かに

弦楽器を中心とした叙情的な主題と変奏。人間の声にもっとも近いといわれるチェロによる穏やかな長調の主題と、短調による絶えいるようなオーボエの嘆きがロンド形式でくりかえされる。途中、独奏管楽器によってマーラー交響曲特有の“問いかけ”も登場し、いよいよフィナーレを迎える準備がととのう。

◆第Ⅳ楽章　きわめて和やかに

詩集「少年の魔法の角笛」による歌曲がこの交響曲をしめくくる。マーラーが永いあいだ親しんできたこのテキストがもつ滑稽さとグロテスクなものの交叉、そして宗教性。これらが集約されているのがこの歌曲であろう。“子供のような無邪気さで”とマーラーによって注釈されたこの歌のもつユーモアあふれた無垢の世界と、そこに到達するまでの苦痛に満ちた人間の肉声と無気味な死の世界。これこそ天上世界への憧憬とそこへの逃避によって救済を見いだしてゆくマーラー自身の姿を反映してるのかも知れない。

（日本マーラー協会事務局長　桜井 健二）

使用楽譜：Universal
作曲年代：1899年～1900年８月５日
楽器編成：フルート４（ピッコロ持替２）、オーボエ３（コールアングレ持替１）、クラリネット３（バスクラリネット持替１）、ファゴット３（コントラファゴット持替１）、ホルン４、トランペット３、ハープ、ティンパニ、大太鼓、トライアングル、グロッケンシュピール、シンバル、ドラ、鈴、弦５部、ソプラノ独唱

第４交響曲のキイワード

昨年公開された、ケン・ラッセル監督の映画「マーラー」を観ましたか？　全編にマーラーの作品が流れる一種の伝記映画なのですが、中で２人の愛娘の質問にマーラーが答えるシーンがありました。「人も神の一部」とマーラーが言ったので娘が尋ねます。「私たちが死ぬと神も少し死ぬの？」「人間の一部は決して死なない。見えない部分だけれどね」「見えないのにあるの？」…ここでマーラーは娘を抱き上げて机の上の顕微鏡をのぞかせます。「なんにもないみたいに見えるガラスの上にも生物がいただろう。見えなくてもそこにあるっていうものがあるんだ」「それは何なの？」「魂とか霊、と呼ばれてる」――こんな風に子供の問いにまじめに、またわかりやすく解答してくれるお父さんっていいなあと思って心に残った一場面でした。実際、娘たちとおしゃべりしている時のマーラーは、ウィーンの歌劇場のオニ指揮者の仮面をはずした、ひとりのやさしいお父さんでありました。この交響曲第４番は、そうしたマーラーの優しい一面が表に出た作品ではないでしょうか。まるで娘たちに「天国ってこういうところなんだよ」と語りかけているようにきこえてきます。（もっとも、作曲年代は結婚前なのですが）そうです。この曲は４楽章のソプラノ歌曲『天上の生活』を目的地にした、天国への道程みたいなものです。その歌曲はもともと第３交響曲の７楽章に「子供が私に語ること」という題で採用されるはずだったのですが、新たなインスピレーションが湧いたのでしょう、この曲をもとに別の交響曲ができてしまいました。（実は第３が長大になりすぎたせい…？）テクストは『子供の不思議な角笛』から「我ら天の喜びを楽しまん」が用いられています。後に載せた日本語訳でおわかりのように、天国の暮らしがいかに心楽しく悩みなきものであるかを歌っています。おいしいものがいっぱいあって、この上なくすばらしい音楽があって、聖人たちがいろいろ世話を焼いてくれるから何の心配もいらない。つまり、天国ではみんな無邪気な子供でいられるのです。

もうおわかりでしょう。第４交響曲のキイワードは「子供」です。マーラーは、子供の心がいちばん天国に近いことを知っていたのです。子供の純真さと子供の世界の豊かさ。それを音楽にしたのがこの曲であり、マーラーはそれを持ち続けていた数少ない大人の一人であったのだと思います。ただ、その表現のしかたが、例えば冒頭の鈴のシャンシャンシャンだったり、１楽章中間部のクライマックスの、トランペットのほとんどバカみたいにあっけらかんとしたメロディーだったり、４楽章の歌の合い間の騒がしいひとくさりだったりするので、あまりに露骨な「無邪気さ」にへきえきする向きもありましょう。それに、天国への道案内をするのは、２楽章のヴァイオリン・ソロ（一音ずつ高く調弦してあるので音がきんきんしています）扮するところの「死神」であるところなど、マーラー流のアイロニーもみられます。一見平和そうに始まる１楽章は不安を内包し、前述のクライマックスの直後、ガラガラと崩壊する音楽の中から、葬送行進曲のラッパさえ聴こえ（有名な第５交響曲の始まりのファンファーレです）、清らかな祈りにも似た３楽章にも、寝た子を起こすような爆発があり……。いかにトロンボーン・チューバを省いたライトな編成にし、古典派風の穏やかな曲づくりをめざしてみても、結局マーラーはマーラー、ハイドンにはなれないのです。なぜなら、マーラーの認識していた「子供の世界」は、深く混沌とした宇宙であり、愛や夢や自然との親密さ、素直さ等と、死や残酷さ、グロテスク、気紛れ等とがごっちゃになっているのですから。そしてそれは、とりもなおさず『子供の不思議な角笛』の世界でもあったのです。ア



「子供の不思議な角笛」第２集、初版の表紙―「音楽の手帖 マーラー」（青土社）より

ルニムとブレンターノの収集・校訂によるドイツ語圏の民謡集『子供の不思議な角笛』には、ドイツ語を話す芸術家の心奥に触れる不思議な音色があるようです。アイヒェンドルフ、ハイネ、メーリケ、レーナウ等々、多くの詩人が、この民謡集に触発された作品をのこしています。マーラーも、ここからたくさんのことばを得て歌をつくりました。いわゆる歌曲ばかりでなく、交響曲（第２番の４楽章、第３番の５楽章、第４番の４楽章）にも使われており、これら第２から第４までをまとめて「角笛交響曲」などと呼ぶこともあります。

このシンフォニーの魅力をことばで表そうと試みてみたものの、結局「百文は一聴に如かず」です。私なども最初は、なんだか軽くって印象に残らない曲だと思っていたのですが、聴けば聴くほどしみじみといい曲だなあと感じられるようになりました。おもしろいことには、オートリバースで聴いていて、４楽章が消えていったあとに１楽章が入って来ても全く異和感がないのです。まるで天国の永遠を象徴するかのように。

◈　　◈　　◈

天上の生活

ぼくらは天上の喜びを味わっている
だから現世のことどもは遠ざけ
世俗の喧噪には耳もかさない
天にあってはだれも！
全てが、この上なく柔和な平和の中に生きている！
ぼくらは天使のような生活を送っている！
なのにとっても愉快なんだ！
ぼくらは踊ったり　とんだり
はねたり　歌ったりしている！
天では聖ペテロが見守っていて下さる！

ヨハネが子羊を放つ
肉屋のヘロデスがそれを待ちかまえてる！
ぼくらは、辛抱強いその生きものを、
辛抱強くて罪のないやつを、
かわいい子羊を死へいざなう！
聖ルーカスは牡牛を屠る
少しのためらいも注意もせずに
天国の酒場では
ワインにお金はかからない
パンを焼くのは天使たち

天国の庭で育っているのは
あらゆる種類のよい野菜！
みごとなアスパラガスにインゲンに
およそぼくらが望むだけのものが！
はちがみんな一杯になってぼくらを待っている
よいリンゴ、よいナシによいブドウ！
どれでもお取り、と庭師たち！

ノロシカがほしければ、ウサギが食べたければ
それらは表通りをこちらへと
走って来るよ！
たとえば断食の日が来るときなら
魚たちはみんな喜んですぐに泳いで来るだろう！
そこをほら、もう聖ペテロが
網とえさを持って
天の池へ入っていくよ
料理するのは聖マルタ

地上には、ぼくらのと比べられるような
音楽なんてないさ
一万一千人の乙女たちが
踊りに行くよ
聖ウルズラさえも、それを見て笑っている
地上には、ぼくらのと比べられるような
音楽なんてないさ
セシリアとその親戚は
すぐれた宮廷楽士！
天使たちの声が
全ては喜びのために目ざめるということを
思いおこさせてくれる

（Vn. 喜多村めぐみ）

禿山の一夜

質問を一つ：今日演奏される「禿山の一夜」は誰が作曲したものでしょうか？

もちろんこのプログラムを手にしている皆さんはすぐ答えられるはずです（あわてて表紙を見ようとしているのは誰ですか？）。

皆さんの知人でクラシック好きの人に、何の前置きもなしに、「先日新響の演奏会に行ってね～」などという挨拶も一切せずに、突然この質問をしてみて下さい。結果はたぶん次のうちのどれかでしょう。

① 「中学以来あまり聴いていないからなあ…。誰だったかなあ…。」モジモジ……
② 「リムスキー＝コルサコフかな？」
③ 「ムソルグスキーでしょう」
④ 「ムソルグスキーが作曲してリムスキー＝コルサコフが編曲したんだよ」

それぞれ1/4ぐらいずつの割合でしょうか。

●ここで音楽の授業の復習です。

19世紀中頃、ロシアのペテルブルグに「ロシア五人組」の名で知られるようになる若い音楽家集団がありました。中心になって他の4人を指導したバラキレフ、陸軍将校で自分で作曲するよりもグループ内での良き批評家であったキュイ、見習士官だったムソルグスキー、海軍士官のリムスキー＝コルサコフ、そして化学者のボロディン。彼らのほとんどは本職が別にあり、ディレッタントの音楽家で、いわば我々の大先輩であります。ボロディンなどはヨーロッパでも最大級に尊敬されていた化学者で、学生達の人気者だったといいます（ショーンバーグ著「大作曲家の生涯」）。

1860年代には、彼らはモスクワの主流派音楽家達に対抗しながら一体となって活動し、お互いの作品に手を加えあったり、批評しあったりしていました。ムソルグスキーはその中で才能はあるが、荒削りで、酒が大好きだったせいか（？）オーケストラ曲の大部分が未完成のままで、生前に楽譜が出版されることさえほとんどありませんでした。アルコール中毒から卒中をおこし、42歳で「五人組」の中では一番早く死んでしまいました。その後、管弦楽法などに洗練されたものを培っていたリムスキー＝コルサコフが、ムソルグスキーの斬新な作風を崇拝しつつも、あまりの粗雑さにがまんできず、ムソルグスキーの作品の改訂を断行したのです。それは歌曲のピアノ伴奏のオーケストレーションから、ムソルグスキーの最高傑作「ボリス・ゴドノフ」まで、現在知られているムソルグスキーの作品のほとんどと言っても良いくらいです。こうしてリムスキー＝コルサコフ版「禿山の一夜」が現在我々が聴く、そして今日演奏される“ムソルグスキーの「禿山の一夜」”なのです。

●復習はこのぐらいにして自由研究にしましょう。

前段まで話が進んで来ますと、当然「では、原曲はいったいどんな曲なのだろう？」と誰もが考えます。アバード指揮・ロンドン交響楽団のレコードが知人のところに有りました。“1986年に新しく出版された原典版”と記されているだけで、校訂の詳細が不明ですので、どの程度ムソルグスキーに忠実かはわかりませんが……。

これがもうすさまじい音の洪水なのです。まさしく悪魔や死霊の饗宴、オドロオドロしい邪鬼の乱舞。のっけの三連符から*ff*、低音の四分音符のリズムはピアノとティンパニの強打、弦の八分音符のきざみにはトランペットの強奏が加わる等々、最初から最後まで（約10分強）、静かな所が皆無といってよく、一気呵成に暴れまくる。確かに粗雑で（リムスキー＝コルサコフ）冗長な部分が多い（レコード解説）のは事実ですが、何か背筋の寒くなるものがあります。

――遠い子供の頃、眠れぬ夜に見る悪夢
自我の発達とともに心の内に自ずと湧いてくる不安
昔、この世に存在しなかったように、いつか必ず来る死の瞬間に消滅するにちがいない自分自身
鬼がやって来る！　悪魔がやって来る！
死神がやって来る！　助けてくれー！　タスケテー!!――

これに対し、リムスキー＝コルサコフ版「禿山の一夜」は日なたぼっこをしながらの楽しく美しい夢物語。「シェヘラザード」、「スペイン奇想曲」と通じる明るい映画音楽なのです。響きが完全にリムスキー＝コルサコフになってしまっている。和音は明解、オーケストレーションもそつがない。もちろん終わりにある静かで美しい朝の場面は原曲にはなかったもののようです。

●……というわけで、始めの質問の答は……

④は正確、③が作曲したという意味で正しい、そして②も音色的には正しいのです。

ある新響の団員は、今回の曲目が決まったとき、「禿山の一夜」のスコアを持っていないことに気付き、あわてて楽器店へ急ぎました。しかし見つからないのです。「○○○にこんな有名な曲のスコアがないとはけしからん」と恐っていました。実は彼はリムスキー＝コルサコフの所ばかり捜していたのです。笑わないで、彼の耳のよさを買ってやって下さい。お願いします。

（新響トレーナー　森山　崇）

使用楽譜：J. Hamelle
楽器編成：ピッコロ1、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、鐘、シンバル、大太鼓、タムタム、弦5部

フランス音楽と木管楽器

新響がまたフランス音楽です。今回で三回連続ですので以前のことを考えると病みつきになったとしか言い様がありません。西洋音楽史上でフランス音楽と並べられるのはドイツ音楽です。以前のプログラム上でその気持の持ち様の違いについてお話したことがありますが、今回は別の面からその違いをとらえてみたいと思います。

この二つの音楽は響きが違うとよく言われますが具体的な要素は何なのでしょうか。作曲の素材、書法、奏法等色々あると思いますが、今回は楽器に焦点を当ててみます。

楽器といっても弦楽器や金管楽器などはよくわかりませんので自分の専門である木管楽器、それもオーボエを中心に述べたいと思います。またこの木管セクションが一番如実にその違いを表わしているのです。

オーボエの先祖は17世紀半ば､フランスの生れですが､おそらく短い間にヨーロッパ中に広まったものと思われます。オーボアというフランス語の名称の発音、或は綴りが伝わり、オーボー（英)、オーボエ（伊)、オボーエ（独）などという呼び方になっています。当時バロック時代は各地で演奏のピッチが違い、フランスで現在より約全音、ドイツで約半音低いのが標準ピッチでした。ドイツの方がフランスより半音高い訳ですが、ベルリン・フィルなどのドイツのオーケストラのピッチが高いのは今に始まったことではないのです、多分。もっとも当時はイタリアの方がもっと高かったようですが。ピッチが違えば音色が違いますからそれだけでも特色は十分出ています。その他の音色を決定する要素も当時から独仏それぞれの独自性をもっていました。

その後、音楽の変遷により楽器も変化していきます。19世紀の初頭までは構造上の違いはなかったのですがその後、木管楽器全般に機械化の波が押し寄せます。ドイツのものは昔ながらのオーボエに一個一個キーを付け加えていったような感じですが、フランスのものは何十年かの期間を経て新しいシステムを完成させたのです。19世紀終りが一番独仏のオーボエの違いが際立っていた時期です。

さて、20世紀に入りドイツ・オーボエにとって重大な危機が訪れました。1904年、リヒャルト・シュトラウスがその著書の中でドイツ・オーボエの後進性を説いたところ、ドイツのオーボエのメーカーはこぞってフランス式の楽器の製造に鞍替して行ったのです。もちろんそれはフランスのメーカーのものとは違っていましたが、元のドイツ・オーボエの良さはかなり失われてしまいました。現在ドイツにおいてはフランス式の楽器、それもフランス製のものが演奏されることがほとんどとなり、ドイツ・システムの楽器が演奏されているのは隣りオーストリアのウィーンだけとなっています。もっともウィンナー・オーボエはドイツ・オーボエの中でもかなり特殊なものです。そのウィンナー・オーボエも現在は日本製とか。世界は一つなのでしょうか。

ドイツ式のオーボエで奏されたブラームス、シューベルト、シューマンはピントがぴったり合ったといった素晴しさをもっています。演奏家の立場で言うと先ず吹きやすい。リヒャルト・シュトラウスは全く余計なことを！

という訳で、現在のオーボエはフランス音楽の方にピントが合っているのです。他の楽器はどうかというとフルートはベームの出現以来それ以前のものと全く違った楽器になってしまったので何とも言えません。クラリネットは日本ではフランス式が主流ですが、ドイツにおいて独自のシステムがオーケストラ等で活躍しているのは頼もしいかぎりです。

ファゴットはオーボエと同じくダブル・リードの楽器であるせいかシステムによる音色の差、演奏者による音色の差の表われやすい楽器です。この楽器はオーボエとは反対にドイツ式の楽器が多数派を占めています。フランス式は今や完全な少数派で、お膝元のパリ管弦楽団でも近年はドイツ式を使っています。バレンボイムがそれを指示したとかしないとか。全く！もうほとんど天然記念物を見る気分です。素晴しい楽器なので何とか末永く続いてほしいものです。色々あったほうが面白いではありませんか。

さて、もし独仏両方の楽器を所有してどちらもうまく演奏できたとしても、一晩の演奏会の内に持ち替えるのは大変なことだと思います。理想を追えばプログラムを組むのも大変なことがおわかりでしょう。大事なことはその差があることを知り、音色、響きに敏感になることでしょう。これは音楽の喜びの一つと思いますが。

今日の新響はどの程度に敏感でしょうか。

（フリーのオーボエ奏者・元新日フィル主席　柴山　洋）

スペイン狂詩曲

ラヴェルのもっとも初期に属する出世作の一つ。第Ⅰ楽章が気分画ふうの「前奏曲」､終曲が写生ふうの「祭り」､その間に第Ⅱ、第Ⅲ楽章としてスペインの郷土舞曲「マラゲーニャ」と「ハバネラ」を組んだ４つの小曲から成る一種の組曲

使用楽譜：Durand
作曲年代：1895年～1907年
楽器編成：ピッコロ１、フルート２、オーボエ２、イングリッシュ・ホルン１、クラリネット２、バス・クラリネット１、ファゴット３、コントラ・ファゴット１、ホルン４、トランペット３、トロンボーン３、テューバ１、ティンパニ、小太鼓、大太鼓、シンバル、タムタム、タンブリン、木琴、カスタネット、トライアングル、チェレスタ、ハープ２､､弦５部



JASRAC
日本音楽著作権協会
理事長　芥川也寸志
〒105 東京都港区西新橋1-7-13
☎(03)502-6551